欧米の録音アーカイブズ

――初期日本語録音資料所蔵機関を中心に――

清　水　康　行

筆者らは、この数年来、蝋管等、19世紀末から20世紀初頭にかけての初期録音資料群の音源保存・音声復元・内容分析を目指した研究プロジェクトを展開している(1)。本稿は、その過程で所蔵状況調査や意見交換のために訪れた、そうした初期録音資料群を所蔵する欧米の録音アーカイブズ(2)のうちの幾つかを紹介するものである。

数年にわたる調査に基づくため、以下で示す内容は、必ずしも最新の情報になっていないことを予めお断りする。また、これらの機関の多くは図書館・博物館等に所属している(3)ので、それらの図書館等に関わる事柄も、余談として、少々、触れていくこととなろう。

1．録音再生装置の発明と、その学術的利用

次章以降で、各録音アーカイブズを紹介する前に、録音再生装置の発明と、その学術的利用の始まりに関して、簡単に述べておく。

1－1．録音再生装置の発明

語られたそばから消えていく会話や演奏を、何らかの機械的な手段により記録し再生する装置の開発は、19世紀半ば頃から欧米各地で試みられるが、実際に録音再生できる装置を作製したのは、1877年、アメリカの発明王 Thomas A. Edison である。Phonograph（phono〈音〉＋graph〈記録するもの〉）と名付けられたこの機械は、音による空気の振動を針先の震えに変え、回転する円筒軸に巻いた錫箔に深浅の刻みをつけて記録し、再生時には、逆に錫箔の凹凸を針先で拾い、空気を振動させて再生する仕組みになっていた。空気振動と針先の振動との間で物理的に情報をやり取りするという本機のアイデアは、媒体が箔から円管・円盤へと移り、振動方向も縦刻みから横揺れに代わり、後には電気信号による増幅を利用するようになるものの、20世紀後半の LP 時代に至るまで、長く受け継がれていく。

ただ、この最初のフォノグラフは、周波数特性が狭く、S/N 比も悪く、しかも数回の再生で S/N 比が急低下するという、録音再生装置として極めて不十分な精度であったが、エディソンは、その後、白熱電球の開発に集中し、フォノグラフの方は、しばらく抛擲された。

その間、電話の発明で知られる Graham Bell の研究所で、Charles S. Tainter らにより、フォノグラフの改良が試みられ、1885年、特許が申請された。Graphophone（フォノグラフの造語成分の逆配列）と命名された同機は、錫箔に代わり、記録媒体に蝋を染み込ませた

ボール紙の円筒を用いるものであった。同機の開発を知り、激怒したエディソンが作製したフォノグラフ改良機も、同じように蝋管を用いるものとなった。

一方、蝋管式蓄音機開発の少し後、1887年に、ドイツ生まれの米国人 Emile Berliner が、新方式の装置を発明する。Gramophone（gram〈描いたもの〉+ phone〈音〉）と命名された同機は、エディソンやベルの機械と異なり、亜鉛円盤に横揺れの溝を刻む方式を採った。平円盤（ディスク）式蓄音機の誕生である。

この蝋管式・円盤式両方式の出現により、録音再生装置は、ようやく実用段階に入る。

１－２．録音再生装置の学術的利用

1890年代になると、録音再生装置を利用し、様々な言語や芸能を、学術目的のために録音する活動が行なわれるようになる。

最も早い例は、1890年にアメリカの人類学者 Jesse Walter Fewkes が、エディソンの蝋管式録音機を用いて、Main 州の Passamaquoddy Indians の歌と物語を録音したものであろう(4)。次いで、1895-97年、Francis La Flesche と Alice Cunningham Fletcher とが、Omaha Indians の歌を蝋管に録音している。また、Frances Densmore は、1907年から1940年代初頭という長期にわたり、多くのアメリカ先住民族の歌や語りを採録している(5)。

世紀の境目の頃になると、今度はヨーロッパで、本格的な録音アーカイブズが設立され、活動するようになる。

1899年、オーストリアのウィーンに、世界最初の録音アルヒーフが創設される。同アルヒーフは、1901年から、自ら作成した携帯可能な平円盤式録音機を用いて、国内外で、比較方言学・民族言語学・民族音楽学の資料となる録音を積極的に行なっていく。

次いで、1900年には、ドイツのベルリンでも、録音アルヒーフが開設される。ウィーンが世界の諸言語を主対象とするのに対し、ベルリンでは、その中心人物が音楽学者であったこともあり、世界の諸音楽を主な対象として、活発に録音活動を展開しはじめる。

こうした中、1900年パリ万国博覧会開催を期に、パリ人類学会は、同地を訪れた世界各国の人々を対象とした録音を企画し、録音博物館 Musée phonographique というプロジェクトを展開している。

これら諸機関の詳しい紹介は、章を改めて示すこととしよう。

２．アメリカの録音アーカイブズ

本章では、アメリカ合衆国にある数多くの録音アーカイブズのうち、筆者の印象に残った４機関を紹介する。ただし、これらの諸機関は、必ずしも、重要な初期日本語録音資料群を有するものではない。

２－１．トマス・エディソン国立歴史公園　Thomas Edison National Historic Park

まずは、発明者エディソンに敬意を表して、ニューヨークの郊外、ニュージャージー州

ウェスト・オレンジにある彼の記念館を訪ねることとしよう。

エディソンが最初のフォノグラフを発明したのは、同州メンロパークに研究所を構えていた時期であったが、現在、その跡地は公園となっており、記念塔と小さな博物館（閉鎖中、2011年再開予定）があるのみである[6]。

彼が蝋管式フォノグラフの改良に取り組むのは、このウェスト・オレンジに研究所を移した直後である。現在、同研究所は、近くにある彼の旧邸と併せて国立公園となり、一般に公開されている[7]。旧邸の裏には、彼の眠る墓所もある。

研究所本館一階の、オフィス兼書庫として使っていた主室には、ライバルであるベルに蝋管式蓄音機を出し抜かれたのに怒ったエディソンが、三日三晩（五日五晩とも）の徹夜の末に作製した自らの蝋管式蓄音機を試聴する姿を描いた絵が、掛けられている。その上階には、彼の作製した蓄音機が何点か展示されており、録音スタジオに用いた部屋にも入れ、興味は尽きない。敷地内には、他に幾つかの実験棟があり、その一つには、蝋管や円盤（彼は円盤式の開発も手掛けている）の実験装置が残されている。

なお、同館のＷＥＢサイト上には、同館が所蔵する初期録音資料の一部が試聴できるサービスがある[8]。

２－２．議会図書館　The Library of Congress

世界最大級の図書館である議会図書館（ワシントン D.C.）には、多くの録音資料群があり、保管部署も幾つかに分かれるが、その一つ、American Folklife Center には、前章で述べた、最初の学術目的録音だと考えられるフューカスによる1890年録音や、ラ・フレッシュ等による1895～97年録音等、興味深い最初期録音資料群が収められている。このうちの後者や、エディソンやベルリナー等による録音の幾つかは、同図書館ＷＥＢサイトで、試聴することができる[9]。

なお、海外の図書館を利用する場合、最初の利用者登録自体が、しばしば大きな難関となるが、当館では、登録申請を受け付けると、同じ部屋に待機しているチューターが、ゆっくりと聴き取り易い英語で、閲覧希望資料の所蔵部署や関連しそうな部署を教え、更に、当館は複数の棟に分かれており、一旦、建物の外に出ると、別棟に入るのに、一々、セキュリティ・チェックを受けねばならないが、この地下道を通れば、そのまま別棟に行ける、というような実用的な案内まで授けてくれ、とても有難い思いがする。

２－３．シュラキュース大学、ベルファー音響アーカイブ
The Belfer Audio Laboratory and Archive, Syracuse University

ニューヨーク州の北西部、シュラキュース大学内にある当館は、340,000点（うち蝋管22,000本）の所蔵点数を誇る全米有数の大規模録音アーカイブであるが、筆者にとっては、当館が、1976年に、次章で述べる、現存最古の日本語録音資料群である1900年パリ録音の復元再生作業を行なった機関であることに大きな意味があった。

当館の展示物中に、エディソンが自動車王 Henry Ford に贈ったという、1877年の最初の録音時に使われたと称する錫箔の断片があるが、その余りの由緒の正しさに、当の館員自身、本物とは信じていないのか、展示ケースにしまったまま、再生実験等は試みていないそうである。

なお、近年、同館所蔵の蝋管録音コレクションの一部をデジタル化し、ネット公開するプロジェクトが進められつつあるが[10]、残念ながら、現時点では、目ぼしい日本語録音は含まれていない様子である。

ちなみに、アメリカの大学施設等では、個人や団体の寄付により、設立・運営されている機関が少なくないが、当館も、ベルファー夫妻という篤志家の寄付に基づき、建てられている。寄付に際し、この夫妻が出した条件は、自らの名を冠することだけで、完成後に建物を訪れたこともなく、運営に口を挟むことも全くない、との話であった。

2－4．カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校、蝋管保存・デジタル化プロジェクト Cylinder Preservation and Digitization Project, UCSB

カリフォルニア州サンタ・バーバラにある当大学の図書館 Donald C. Davidson Library には、幾つかの特別コレクションを扱う Department of Special Collections という部門があるが、その中の一つが、当蝋管プロジェクトである。

同サイトの解説[11]によると、このプロジェクトは、2002年に開始し、多額の資金援助を得た2003年からデジタル化を進め、早くも2005年には蝋管5,000本分の録音内容の公開を始めている。その進行ぶりの早さには、感心する他ない。

その後も計画は進展し、現在では、約36,000点のデジタル化ファイルを有する蝋管録音アーカイブズとなっている。ただし、ここでも、日本語録音に関しては、特に注目すべきものは含まれていないようである。

3．ヨーロッパの録音アーカイブズ

１－２で述べたように、ヨーロッパでは、1900年前後から、各地に、学術研究目的の録音アーカイブズが設立され、録音活動を始めている。そうした中で、当地を訪れていた日本人による録音も、幾つか残されており、これらは、現存最古の日本語録音資料群を構成するものとなっている。本章では、主に、これら最初期日本語録音資料群を所蔵する機関を中心に、ヨーロッパの代表的な録音アーカイブズを紹介していこう。

3－1．オーストリア科学アカデミー録音アルヒーフ Das Phonogrammarchiv - Österreichs wissenschaftliches audiovisuelles Archiv

ウィーン大学本部の裏手、大学関連の建物が並ぶ一角に居を構える当機関は、1899年に設立された世界最古の録音アルヒーフであり、創立百周年ともなる1999年には、その初期録音コレクションが UNESCO「世界の記憶 Memory of the World」（世界記録遺産）に登録さ

れている[12]。創設者は、ウィーン大学教授（生理学）・帝室科学アカデミー会員であったSigmund Exnerと彼の同僚達で、高名な物理学者Ludwig Boltsmannもその名を連ねている。

このアルヒーフでは、当初から、録音資料の持つ「永続的」な複製可能性に注目し、複製盤の作成が容易な円盤式録音装置を独自に開発し、1901年以降、国内外での録音活動を展開していった[13]。音楽・芸能関係のものもあるが、世界の諸言語の録音に力を注ぎ、エクセナーによってカタログ化された早期の録音2,000点中だけでも、収録された言語数は200以上に及び、その中には現在は絶滅してしまった言語も含まれている[14]。

これらの録音原盤は第二次大戦末のウィーン大空襲時に灰燼に帰したが、複製用に作製したネガコピー盤は疎開して無事であったため、現在、その型から複製盤を作製することが可能である。これら初期録音を含めた当機関所蔵の約67,000点の録音資料群は、順次、オンラインカタログ化されている[15]。WEB上での試聴サービスはしていないが、研究者は、アルヒーフに出向くか、メイル等で要望をすれば、録音内容を聴くことが可能である。

上掲オンラインカタログによれば、このアルヒーフ所蔵の日本語録音は、1901年録音のものから1999年録音まで、14種・計41点あるが、最も古い1901年４月14日に録音された３点の吹込者は、当時、ウィーン大学医学部に留学していた今村新吉（1874-1946。帰国後、京都帝大医学部精神病学講座の初代教授）である[16]。

なお、当アルヒーフは、純粋な研究アルヒーフで、カタログ中には商業用に販売された製品ソフトは含まず（それらの所蔵・公開は全て別組織に委ねる姿勢を明確にしている）、研究者以外への音源公開には、一部の代表的な録音をCD化しているのを除き、消極的である。スタッフには言語学・民族音楽学等の研究者や工学関係の技術者を擁し、設備も充実しており、訪れる度に、今後、日本でも本格的な研究アーカイブズを構築する上での良い手本となろうと感じると同時に、ソフト面・ハード面共、少々の臨時プロジェクトの研究資金では、到底、実現は叶わないだろうという気分にもさせてくれる組織ではある。

３－２．ベルリン録音アルヒーフ　Das Berliner Phonogramm-Archiv

現在はベルリン西部のダーラムにある民族学博物館内に置かれている当アルヒーフは、1900年、ベルリン大学教授（心理学）Carl Stumpfが同大学内に創設した、歴史あるアルヒーフで、その初期コレクションは、1999年、前節で述べたウィーンのアルヒーフと同時に、同じくUNESCO「世界の記憶」に登録されている[17]。アルヒーフとしての創設はウィーンが一年先んずるが、録音活動を始めたのはベルリンの方が早く、互いに、我こそは世界最初の録音アルヒーフである、という自負を持ち合っている。

ウィーンのアルヒーフが世界の諸言語の録音収録に主眼を置いたのに対して、音楽学者Erich von Hornbostelが主導した当アルヒーフは、世界各地の民族音楽を主対象に、活発に録音活動を行ない、初期の蝋管録音だけでも16,000点余のコレクションを築いていく。第二次大戦後の一時期、これらは東西に分割されるが、ドイツ統一後の1991年に再統合され、1990年代末以降、それらのデジタル再生化が進められている[18]。

1901年11月、当地を公演旅行で訪れていた川上音二郎一座が吹き込んだのを最初に、日本音楽の録音が何点か残されており、ドイツ人の日本音楽研究者により編纂された、それらの復刻 CD が出ている[19]。

当アルヒーフは、WEB 上での公開には熱心でないが、上掲のような学術的解説を伴う復刻 CD の作製や、創設百周年に際しての記念論文集[20]の刊行、関連人物事典も兼ねた浩瀚な所蔵蝋管目録[21]の編纂などには積極的で、他に得難い貴重な情報を提供してくれている。

また、民族学博物館の正面入口を入って直ぐのコーナーには、上掲の川上一座の花形、貞奴（1871-1946）による箏曲演奏を含む、当アルヒーフの新旧の録音を楽しむブースが置かれていて、ちょうど筆者が訪れていた折には、少年少女達が熱心に耳を傾けていた。博物館内には、当アルヒーフ所蔵の蝋管や蓄音機等を展示した一室も設けられている。

３－３．（パリ）録音博物館　Musée phonographique

本節名は、これまでの諸節と異なり、現存する機関の名称ではなく、内容となる録音資料コレクション名とも言うべきものである（これも正確ではない）。そうした理由は、本節の記述により、明らかになるだろう。

１－２でも触れたように、1900年パリ万国博覧会（同年４月14日～11月５日）開催を期に、パリ人類学会 Société d’anthropologie de Paris は、同地を訪れた世界各国の人々の声を蝋管に収めた「録音博物館」の設立を企画する。この企画の経緯と成果については、それを発案・遂行した Léon Azoulay による一連の報告が残されている[22]。それにより、この企画が、その前年にウィーンに設立された録音アルヒーフの存在に影響を受けていること、ウィーンの創設者エクセナーとパリの企画者アズレイとの間に交流があったことなども知られる。

この企画の結果、50の言語により、『聖書』朗読、音節読み上げ、自由会話、歌唱などの興味深い録音が、計351点、残された。その中には、1901年７月20・22・23日と８月21・28・29・31日に吹き込まれた、日本人による録音も、14点、ある。これらは、録音年月が確認される限りでは、現存最古の日本語録音資料群であり、この「発見」[23]と、その吹込者中、７月組の一人が人見一太郎（1865-1924。熊本県出身のジャーナリスト）であり、８月組が岩間くに（1858～？。東京出身の料亭女将）率いる新橋芸者一行であることを確定したのは、我々の研究プロジェクトの大きな成果であるが、本稿の趣旨とは離れていくので、その詳細には立ち入らない。

この録音博物館プロジェクトは、その名に相応しい常設の機関が設立されたものではなく、企画者アズレイも、目立った活動を継続した様子は窺えない。

その後、この録音資料群は、主に1930年代に録音された他の資料群と一緒に、フランス国立科学研究センター Centre national de la recherche scientifique = CNRS の所管となり（一方で、そもそもの企画主体のパリ人類学会は現存している）、暫く、1900年万博会場の地（メイン会場はセーヌ対岸のエッフェル塔の建つ一帯）に建つシャイヨー宮の人類博物館 Musée de l’Homme 内にある民族音楽学研究所 Laboratoire d’ethnomusicologie に置かれて

いて、筆者らが当該録音を初めて聴き、関連する記録資料群を閲覧したのも、同所であった。ところが、同研は、人類博物館の機構改編の余波で、2008年に同博を離れ、名も民族音楽学研究センター Centre de Recherche en Ethnomusicologie = CREM と改め、郊外のパリ西大学 Universite Paris Ouest に居を求めている。

CREM と改まって間もなく、この録音博物館の録音内容の一部がネット上に公開されるが、短期間で URL が変更になる等、やや安定していない様子である[24]。なお、既公開の中には、日本語録音は含まれていない。

3－4．大英図書館音響アーカイブ　The British Library Sound Archive

今更いうまでもなく、大英図書館は世界を代表する歴史ある図書館であるが、そこに録音アーカイブが置かれたのは、そう古いことではない。当アーカイブの前身は、Patrick Saul という人物が1955年に私的に立ち上げた大英録音音響研究所 The British Institute of Recorded Sound という組織で、それが発展し、1983年に大英図書館の帰属となったものである。帰属後も暫くは、図書館本体とは離れた場所で、大英図書館国立音響アーカイブ The British Library National Sound Archive = NSA と名乗り、同図書館の一部である観は余り持たなかったが、近年は、図書館本館内に本拠を置き、名も明白に同図書館のアーカイブと呼ばれるようになった。現在では、市販ソフトや放送録音等も網羅した数百万点のコレクションを有する世界最大級の録音アーカイブとなっている。

設立の時期は新しいものの、古い録音資料の収集にも熱心で、蝋管等の初期録音資料群も、少なからず所蔵している。それら蝋管資料群の中に、日本関係と思しきものも含まれている[25]が、これらは、いずれも不思議な代物である。REF：C673に分類される蝋管３本は、「ピウスツキ蝋管」[26]として知られる、ポーランドの革命家 Bronislav Pilsudski が、1902～03年頃、樺太で録音したアイヌ音楽であり、C665となる１本は、３－２で取り上げた、1901年にベルリン・アルヒーフが録音した貞奴の箏曲である。これらは何らかのコピー製品であろうか。そして、C670とされる７本は、「1910年頃に、日本で、不詳人物によって録音された recorded in Japan c.1910 by an unknown recordist」とされるものだが、筆者が一聴した限りでは、僅かに挨拶らしい語が聞き取れた以外、いずれも、およそ日本語には聞こえなかった。しかも、これらの蝋管は、何と、かの『金枝篇　*The Golden Bough*』で名高い James George Frazer のコレクションによるものだそうである[27]。調査の種は、尽きない。

４．その他の録音アーカイブズ

前章までで取り上げた録音アーカイブズは、世界の録音アーカイブズの中で、比較的、名の通っているものばかりであるものの、ごくごく少数で、そのほんの一部さえ構成していない。しかも、これらは、（エディソン公園は、やや趣が違うが）主に学術的研究のためのコレクションを意図した、いわゆる研究アーカイブズばかりである。

録音アーカイブズには、これ以外にも、放送局が、過去の放送番組内容を保存したり、将

来の番組制作のための音響素材を蓄積することを主目的とした放送アーカイブズや、レコード会社が、自らの製品現物や録音音源を保存しておくのを目的とした企業アーカイブズなどがある。

筆者の最近の主たる興味が1900年前後に録音された初期録音資料群にあるので、1920年代以降に始まる放送番組録音への関心は向かないが、時代が少し下ると、放送アーカイブズが持つ録音群の資料的価値は大変に重要な位置を占めることとなる。しかし、筆者の僅かな経験から推しても、こうした放送アーカイブズは、音源の権利関係に神経を使うこともあり、部外の研究者による資料利用に対しては、相当に消極的である。

長い歴史を持つレコード会社のアーカイブズには、貴重な初期録音資料群が存在する可能性がある。実際、円盤式レコードを開発した米国グラモフォン社の支店として出発し、20世紀初頭に、カルーソーやシャリアーピンといったスター歌手の録音・販売に成功して、レコード産業隆盛の道を拓いた英国グラモフォン社の後裔である英国 EMI 社のアーカイブズからは、1903年に同社の遠征隊が行なった日本最初の円盤式録音[28]と、1900年にパリ興行で人気を博していた川上音二郎一座のパリでの録音[29]、それぞれの音盤製品一式が見つかり、復刻 CD 化されている。ただし、言うまでもなく、これらの企業アーカイブズは、特別なルートを通さない限り、研究者への門戸は開きたがらない。

さらに、インターネット時代となって以降は、本稿でも、しばしば言及してきたとおり、既存のアーカイブズが自身のコレクション内容をネット公開することに神経を用いているのと並行して、固有の建物や組織を持たない、多くの場合は匿名の個人か団体によって運営される、ネット上の録音アーカイブズが登場している。たとえば、それらの中では老舗といえる tinfoil.com というサイトでは、エディソンによる発明の翌年、1878年に吹き込まれた、おそらく現存最古の録音と思われる「声」を聴くことができる[30]。

さて、日本では、こうした録音アーカイブズの持つ歴史的意義や資料的価値についての認識は十分ではない。図書館では、未だに、録音資料や映像資料といった非文献資料群に対して、本腰を入れていないように見える。たとえば、国立国会図書館には、音楽・映像資料室という部署があり、20世紀半ば以降のレコード・CD は、これは相当数、保有しているものの、それ以前の古い SP 盤や蝋管となると、ほとんどカタログ化されていない。録音アーカイブズと称せる機関も無い訳ではないが、本稿で言及した諸機関に互せるものがあるかというと、些かならず、心許ない。試みに、世界の録音アーカイブズ関係機関が参加している国際団体 International Association of Sound and Audiovisual Archives = IASA のサイトを見ると、世界各地の参加機関や関連組織へのリンクが張られている[31]が、そこに掲げられる中に、日本に本拠を置くものは、一つも見当たらない。

こうした現状に風穴を開け、録音アーカイブズの重要性に気付いてもらうことも、我々のプロジェクトの課題の一つであるが、なお遠い道さえも見えてこないというところだろうか。

注

(1) 本稿に関わる調査は、科学研究費補助金研究課題「蝋管等の古記録媒体の音声表現に関する非接触的手法の開発と活用に関する研究」(研究課題番号：14023109、研究代表者：清水康行、2002-2005年度)、同「蝋管等の録音資料からの音声復元と内容情報の分析に関する横断的研究」(18202011、同上、2006-2008年度)、同「蝋管を中心とした初期録音資料の音源保存・音声復元・内容分析に関する横断的研究」(21242011、同上、2009-2012年度（予定)）の一環として行なわれ、本稿は、その成果の一部である。

(2) 「アーカイブズ」は「記録保管所」とも訳されるが、これに関する研究を目的として2004年に発足した学会が「日本アーカイブズ学会」と名乗る（http://www.jsas.info/）ように、カタカナ語として定着しつつある。なお、英語では、単数形 archive と複数形 archives とがあり、複数形を用いることが多いが、単数形の場合もある。ちなみに、ドイツ語では単数形 Archiv が普通であり（複数形 Archivs も用いるが)、本稿でも、ドイツ語系の機関名ではアルヒーフと表記する。

(3) 録音アーカイブズには、独立した建物を有するのではなく、図書館や博物館等の一部を用いているものが多い。しかし、筆者の理解力不足のためか、当該機関が、母屋の組織に属する部局なのか、単に間借りしているだけの関係なのかについては、説明されても、釈然としなかった場合も少なくない。

(4) James Hardin “The Archive of Folk Culture at 75: A National Project with Many Workers”, *Forklife Center News* XXV-2, p. 4, American Folklore Center, The Library of Congress, 2003.

(5) Hadin 前掲書および http://siarchives.si.edu/research/sciservwomendensmore.html 参照。

(6) http://www.menloparkmuseum.org/

(7) http://www.nps.gov/edis/index.htm

(8) http://www.nps.gov/edis/photosmultimedia/the-recording-archives.htm

(9) http://memory.loc.gov/ammem/browse/ListSome.php?format=Sound+Recording

(10) http://libwww.syr.edu/information/belfer/cylinders/index.html

(11) http://cylinders.library.ucsb.edu/overview.php

(12) http://portal.unesco.org/ci/en/ev.php-URL_ID=22645&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html ちなみに、特定の建造物や自然景観など不動産を対象とした「世界遺産」制度が広く知られているのに比べ、文書・写真・映画などの動産を対象とした「世界の記憶」の方は、日本からの登録が未だ無いこともあり、残念ながら一般の理解と関心は高くない。

(13) Dietrich Schüler (ed.) *Austrian Academy of Sciences, Phonogrammarchiv*, Phonogrammarchiv, 1999.

(14) Sigmund Exner (ed.) *Katalog I der Platten 1-2000 des durch die Mittel der Treitl-Stiftung gegründeten und erhaltenen Phonogramm — Archives der Akademie der Wissenschaften in Wien*, Phonogramm-Archives ... in Wien, Wien, 1922.

(15) http://catalog.pha.oeaw.ac.at/index.html.en

(16) この今村録音の概要は、縄田雄二「ウィーンに保存されていた一九〇一年の日本語録音」(言語』32-3、2003）で紹介されている。筆者らが、当アルヒーフで当該録音を初めて聴いた時、館員の Franz Lechleitner 氏が、これを聴く日本人は君らが二番目だ、と言っていたが、縄田氏が当該録音を聴いたのは、我々より数か月前のことだったらしい。

(17) http://portal.unesco.org/ci/en/ev.php-URL_ID=23211&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html

(18) 当アルヒーフおよび同デジタル化計画の概要については、同計画の責任者である Susanne Ziegler 等による論文、コッホ他「ベルリン録音資料館（Das Berliner Phonogramm-Archiv)：音響記録の宝庫」(『日本音響学会誌』60（7)，pp.386-391，2004年）に詳しい。

(19) *Walzenaufnahmen japanischer Musik (Wax Cylinder Recordings of Japanese Music) 1901-1913* (Berliner Phonogram-Archiv Historische Klangdokumente (Historical Sound Documents) 1, Staatliche Museen zu Berlin, 2003)。同 CD には、Arthur Simons（当時の所長）による序文、Susanne Ziegler（前掲）と Albrecht Wiedmann（デジタル化の実務者）とによる全般的解説と、Ingrid Fritsch（日本音楽研究者、Köln Univ.）による収録内容の解説を含む、大部のリーフレット（独英両語）が添えられてい

る。

⑳ Artur Simon (ed.) *Das Berliner Phonogramm-Archiv 1900-2000 – Sammlungen der traditionellen Musik der Welt (The Berlin Phonogram Archive 1900-2000 – Collection of Traditional Music of the World)*, VWB, Berlin, 2000.

㉑ Susanne Ziegler *Die Wachszylinder des Berliner Phonogramm-Archivs*, Ethnologisches Museum Berlin, Staatliche Museen, Berlin, 2006.

㉒ Léon Azoulay "L'ère nouvelle des sons et des bruits -musées et archives phonographiques", *Bulletins et mémoires de la Société d'anthropologie de Paris [BSAP]* V-1, 3 Mai 1900. "Sur la construction d'un musée phonographique", *BSAP* V-1, 7 Juin 1900. "Sur la Maniére a été constitué le Musée phonographique de la Société d'anthropologie", *BSAP* V-2, 18 Avril 1901. "Le Musée phonographique de la Société d'anthropologie", *BSAP* V-2, 2 Mai 1901. "Liste des phonogrammes composant le Musée phonographique de la Société d'anthropologie", *BSAP* V-3, 3 Juillet 1902. "Un progrès important pour les Musées phonographiques, - reproductions galvanoplastiques des phonogrammes. - Moules métalliques inaltérables", *BSAP* V-3, 5 Novembre 1902.

㉓ 当該資料群の内容を、日本に紹介したのは、筆者らが初めてであり、その意味では「発見」であるが、前掲注に示した文献には、当該日本語録音の存在が明記されており、我々が試聴を申し出た際にも、担当者 Pribislav Pitöeff 氏は直ちに当該録音内容を再生録音したテープを聴かせてくれたのだから、欧州にあっては、新発見でも何でもない、先刻ご承知の資料だったと言える。

㉔ 2011年1月段階での URL は、次の通り。http://www.crem-cnrs.fr/archives_sonores/cylindres.php

㉕ http://www.bl.uk/reshelp/findhelprestype/sound/wtmusic/waxcyl/waxcylinders.pdf

㉖ 加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』（国立民族学博物館研究報告別冊5号、1987）参照。

㉗ Alan Ward "The Frazer Collection of Wax Cylinders: An Introduction", *Recorded Sound*, No. 85, 1984. 参照。

㉘ 『全集　日本吹込み事始』（東芝 EMI、TOCF-39061～71）として CD 復刻。ちなみに、この遠征隊を率いて録音を行なったのは、カルーソー録音に成功した大立者 Fred W. Gaisberg その人である。

㉙ 『甦るオッペケペー―1900年パリ万博の川上一座―』（東芝 EMI、TOCG-5432）として CD 復刻。ただし、この録音には、なぜか、一座の看板である音二郎と貞奴は、参加していない。

㉚ http://www.tinfoil.com/cm-0101.htm

㉛ http://www.iasa-web.org/links

［謝辞］

本稿を作成するに際しては、本稿で取り上げた機関の関係者は勿論、国内外の多くの方々の御世話になっているが、それらの方々の御名前を掲げて謝することは、今般は、控えさせていただく。

本誌・本号は、田中功先生の御退任記念号として編まれたもので、その特集となる諸論考の間に、私のような門外漢が、このような蕪雑な文章を挟み込ませたのは、誠に申し訳ない限りであるが、これまで先生から頂戴した多大の恩義、御厚情に、少しでも感謝の思いをお伝え申したかったのと、先生から、何か海外図書館訪問記のようなものを書け、と言われたのを安請け合いしたまま果たさなかったことへの御詫びを込めて、本稿を捧げる次第です。

なお、本稿の注には、WEB サイト情報が幾つも並んでいるが、これには、折角、先生から習った情報の提示が欠けている。ネット情報は、いつの間にか消えてしまう恐れがあるので、そのサイトを閲覧した日付を必ず添えよ、ということである。実際、本稿を執筆してい

る過程でも、以前は存在していたサイトが消えてしまっていたり、URL が変更になっているものに、何度も遭遇した。なので、校正段階でも、注に掲げた全てのサイトの存在を確かめ、その日付を、ここに記しておきたい。現時点では、全て、2011年１月11日閲覧となる。